文化

生涯を懸けた詩歴の証し

「畠山義郎全詩集」刊行に寄せて(下)

磐城葦彦

県現代詩人協会前会長であり、同人詩誌「密造者」の発行人を務め、長きにわたり秋田の現代詩の代表的な存在として輝き続けている畠山義郎さんが、90歳の卒寿を記念した「畠山義郎全詩集」(コールサック社)を刊行した。

◇

1946(昭和21)年に畠山さんが初めて刊行した手作りの詩集「羈旅(きりょ)」と第三詩集の「故郷の星」、そして戦中に全国の若い詩人たちの命を懸けたというべき「詩叢(しそう)」の3冊が、長い年月を経た末に「復刻版」として日の目を見たのである。

それだけに畠山さんは、「活火山の晩節の噴火」と同じ印象を与えるほどの「詩魂いまだ衰えず」という証しを、全詩集の刊行によって示したのではなかろうか。

いわき・あしひこ　35年小坂町生まれ。「密造者」同人。「詩人会議」事務局長。「労働者文学会」代表幹事。県現代詩人協会会員。詩集に「雲と草原」「地路歴程」など。横浜市。

これら3冊に収録された作品は、いずれも41(同16)年から47(同22)年ごろに作られたものばかりである。戦前から戦後にわたる激動下での、まさに青春真っただ中での取り組みであった。いつ招集されて戦場に駆り出されるかもしれない恐怖と、敗戦の痛みを背負った時代のことであるだけに、驚くべき活動であると思わざるを得ない。

全詩集には、こうした青春の記念碑と位置付けられるものを含む10冊の既刊詩集が収録されている。このほか、詩誌、新聞などに掲載された作品のほか、詩人論、詩論、各種自治体の論評、詩集未収録の作品、作詞した校歌の楽譜も全て収められている。

まさに人生の集大成として編まれた大冊である。そして、合川町長を長く務めた畠山さん自身が語る「生いたちの記」と「年譜」は、単なる個人の記録にとどまらず、地方史という価値を持った貴重な資料といえる。

刊行に当たっては、コールサック社の呼び掛けもさることながら、多くの資料提供者と収集に協力してくれた人たちの支えがあった。さらに付加するならば、地元の協力者のほか、安部綱江、杉渕テルの両女史の並々ならぬ尽力があったことも、特記しておかねばならない。

畠山さんは全詩集で「長い間の公職と、日常の詩的感覚と、毎日毎日の二十四時間が、そのなかに積み込まれる時間感覚とに、頭のてっぺんから足のつま先まで、処理しかねて大病を繰り返し、最近は視聴覚が弱まり、自分でおぼつかないことが多くなった」と述懐されている。

それでも畠山さんは、4月に私が「農民文学賞」を受賞した際、耳が悪いのにもかかわらず自らお祝いの電話をくれた。日頃の欠礼をわびつつ言葉を交わし、「畠山義郎全詩集」のことを少しだけ話し合ったことが、強い印象として残っている。

私は亀谷健樹さんと共に、コールサック社の鈴木比佐雄さんからの依頼で編集委員に名を連ねることになった。解説の文章に書くに当たっては、膨大な分量の全詩集の初校ゲラを手にして、限られた枠内でまとめる難しさにしばし頭を抱えた。しかし、私にとって「師ともいうべき人」として師事してきた畠山さんのためなら、との気持ちを奮い立たせて書いた。

◇

作品「無限のひとり旅」の〈索漠の日々／冬の季節から／圏外に飛び出した／ひとりはもともと／多数のなかのひとりで／嘘(はったり)の／一輪の花／一杯の水は／どこへ消えたか／本当の／ひとりが／宇宙をさまよう〉の言葉こそは、「巨星堕(おち)ちず」の感慨を与えずにはおかないだろう。

◇

「畠山義郎全詩集」の問い合わせは、コールサック社☎03・5944・3258